



▲パンジー、ノースポールなど、春の花を植え替えていきます。



▲力を合わせて、重い肥料を一輪車から下ろします。

元気 いっぱい!

有帆小学校 園芸委員会

平成12年の教育長賞、15年の優秀賞など、山口県花いっぱいコンクールで、その取り組みが高い評価を受けている有帆小学校。季節ごとに咲く色とりどりの花のお世話は、5・6年生の園芸委員が中心となって行っています。「花が大好き!」という部長の山下彩花さん(6年生)をはじめ、自ら希望して園芸委員となった児童にとっては、始業前に行う朝の水やりや、季節ごとの花の植え替え作業も全然苦にはならないようです。「子どもたちが意欲的に取り組んでくれるので、とても頼もしく思います。大人になっても、花や自然を愛する気持ちを持ち続けてもらいたいですね。」と園芸委員会を担当する佐々木千秋先生も、児童の奮闘ぶりに目を細めていました。「私たち6年生が卒業しても、ずっと花がいっぱいある有帆小学校だったらいいな。」と笑顔で話す山下さん。降り注ぐ太陽の光と、園芸委員みんなの愛情を体いっぱい吸収した草花は、有帆小の児童の心に「優しさの花」を咲かせたようです。

千匹ものヒメボタルが一斉に点滅を繰り返す幻想的な光景が、新聞やテレビで紹介され、ここ数年、初夏の竜王山には多くの人を訪れるようになりました。そのヒメボタルを保存、伝承していかうと2年前に地元の人たちを中心に発足したボランティアグループが、「竜王山ホタルの会」です。

「実は、ヒメボタルという学名を知ったのは、7、8年前のことで、それまでは「ヤマボタル」と呼んでいたのですよ。」と意外なエピソードを話すのは同会の木村實会長(右写真)。木村さん曰く、「物好きの集まり」という約20人の同会のメンバーは、多くの人々がホタル見物に訪れるようになると、鑑賞スポットに出向き、ヒメボタルの特性などのガイド役を務めながら、真っ暗な山道に不案内な人が危険箇所には足を踏み入れないように注意を払うことも忘れません。また、毎夜変化する発生数や発生区域を調査し、その結果をデータ化、分析する作業も行っています。

「観に来た人には、ホタルが住む環境が残っていることについて、少しでもいいので、考えてもらえたらと思います。ホタルを通じ、自然を守っていく心が次の世代に引き継がれていくことを願わずにはられません。」と木村さんは強く訴えます。

5月下旬から6月中旬にかけての雨や風のないジメジメした夜が、ホタルの大量発生に出会える可能性が高いそうです。鑑賞する際には、騒ぐことはもちろんですが、フラッシュを使った写真撮影など、マナー違反には気をつけて、静かにヒメボタルを見守ってあげましょう。

夢 いっぱい!

「人間は、あるがままの自然と共生すべきではないでしょうか?」



「竜王山ホタルの会」会長
木村 實さん
(木戸中の町)